

丹羽京子編訳

『ベンガル詩選集…もう一つの夢』

大同生命国際文化基金 二〇二三年九月

本書は、詩聖タゴール（一八六一—一九四一）を引き継ぐベンガル詩人によって生み出されたベンガル詩作品の訳詩集であり、訳者丹羽京子氏が選んだ現代ベンガル詩を代表する七名の詩人が年代順に並べられている。訳者は、訳詩とともに、ベンガル詩を理解する上で有益な詩人の閲歴を、訳詩の冒頭と巻末の解説で丁寧で紹介している。読者はベンガル詩人の、いわば「個の輪郭」に触れつつ、かれらの詩行を味わうことができる。訳者は、タゴール以降のベンガル詩の潮流の特徴を以下のよう概観している。

ベンガル現代詩は巨人タゴールを乗り越えることから始まったとされる。そしてそれが本格的に展開するのは、一九三〇年代に登場したジボナノイドをはじめとする詩人たちによってであった。新しい世代の詩人たちは、ただ目の前に聳え立つがごとくのタゴールを乗り越えたかっただけでない、そこにはタゴールを乗り越えなければならぬ切実な理由があった。世界は大きく変わりつつあり、彼らの心情もタゴール亡きあと、ベンガルをふたつに引き裂いたインドとパキスタンの分離独立とその後の混乱の時代を生き、そしてなによりこの世代は、こ

うした混沌とした歴史を背景に、ベンガル文学史上初めて「神なき」世界を生きたのであり、その世界における表現をせまられたのである。（二四〇頁）

本書で採りあげられたベンガル詩人たちは、いずれも、タゴールの圧倒的な存在感の中から、ここにいう「神なき世界」の地平へと踏み出した詩人たちである。ジボナンド・ダーシュ（一八九九—五四）は、ベンガル現代詩のマニフェストとされる「ポノロタ・シェーン」を発表したことで知られるタゴール以後のベンガル詩を代表する存在であり、ブッドデブ・ボシュ（一九〇八—七四）は、現代ベンガル詩の指標とされるアンソロジー『現代ベンガル詩』（一九四〇年）の編集などでベンガル詩の普及にも貢献し、理論家としても知られる詩人である。共産主義運動にも深くかかわった経験をもつシュバシュ・ムコッパダエ（一九一九—二〇〇三）、社会派と抒情性を併せ持ったションコ・ゴージュ（一九三二—二〇一三）、アルコール依存症との苦闘の中で詩を発表し続けながら独自の詩風を確立したショクテイ・チョットパツダエ（一九三三—九五）、哲学的な詩風をもつビノエ・モジウムダル（一九三四—二〇〇六）、ベンガル詩の現代的可能を切り開き続けるジョエ・ゴージャミ（一九五四—）、など、いずれも個性豊かな経歴をもつ詩人たちである。彼らの生涯と詩には、歴史に翻弄されたベンガル語圏における文学の運命と詩人の魂の軌跡が刻印されている。

訳詩集全体を通して、ベンガル語の詩群の中に、ベンガルの瑞々しい自然風土への詩人たちの深い思い入れの反映が読み取れる。それは、あたかも詩人たちの内面の葛藤と呻吟が、広

大な自然界と人間との内的な対話の延長線上で、かれらの詩的想像力と結びついていくかのようである。例えば、ジボナンドの詩にみられる、「生命の抑えがたい青い酔いで」（二二頁）、あるいは、「別れの物語の灰色が そのつやのない髪に映るだろう」（三五頁）、といった鋭利で斬新な詩句についても、詩人にとつての切実な思いが詩として昇華する過程にベンガルの自然風土が現代的解釈を経た上で介在しているようにも思われる。ベンガルの生活空間（例えば、西ベンガルの都市コルカタへの愛着など）や、詩に織り込まれた多種多様な草木の名称（例えば、カーシュ、ジャム、タマリスク、クリシユンジョチュラ、デボダル、ジャムルル、ピンロウ、シウリ、ボクル、バニヤン、トゴル、シウリ、など）も、とりわけベンガルの読者に独特の詩情を喚起するものであろう。

ここでは、水面に映る蒼穹は、地上と天空が相互に呼応するかのように、「銀色の水は仰向けになって夢を見る」（四〇頁）と表現される一方で、詩人は、豊饒な自然を、ためらうことなく「無機的な」人間の生活世界に美しく詩に読み込む。

輝ける河の収穫

山また山と積まれていくイリシュの死体

それは河の重みの

歓喜溢れる死の山である それから

コルカタのセピア色の朝には 家々でイリシュを揚げる香り

「イリシュ（ベンガルの雨季を代表する川魚）」

（ブッドデブ作）

人間社会も、ベンガルの自然界の運行の中では、「葉をつけたまま枯れた枝」（二五六頁）という隠喩となって表される。ま

た、時に、ベンガルの「森」は、あてどなく浮遊し、孤立する人間のニヒリズムをも包みこむ太古の「自然」のメタファーとして登場する。

わたしたちは 森よりもっと古い森へと漂って行った

朽ちることのない葉っぱの切手も

そこでは石に溶けてしまうという そんな

世界というものが失われ 人と人とのつながりだけの国へと

わたしたちは漂って行った

「晩秋の森でわたしは郵便配達を」

（シヨクティ作）

本書の訳詩はベンガル語のオリジナルの詩形がわかるように工夫されているが、訳者による解説を通じても、ベンガル詩の表現する内容と形式の問題がベンガル詩人たちにとつてどれほど深刻な意味あいを持ったかが見えてくる。その点で、特に興味深いのが、ベンガル詩の詩形の多様性である。

元来、ベンガル詩は韻律を重要視してきたが、タゴールの時代にベンガル詩の韻律が大々的に組み直されて以来、現代詩はその大枠のなかでさらなる発展を遂げてきたという。注目されるのは、現在においてもベンガル詩が散文詩、自由詩よりもなにかの韻律を用いた韻律詩が主流となっているという点である。訳者は、その内容からすると「定型詩」的な要素と無縁であるような、「編集長どの、以下に署名しましたものには、若干の土地がごさいます。」で始まる「これから」（シユバシユ作）が「一定の韻律型」に乗せられている点や、韻律型で複数

の人物を識別させる技巧（シヨンコ作の「ジヨムナボテイ」を紹介している（二五九頁）。また、外来のものである「ソネット（十四行詩）」がベンガル詩と親和性が高く、ほとんどの詩人がそれぞれのスタイルで「ソネット」を書いており、ベンガル詩の一つのスタイルとなつていふ事情も伝えられている。

本書で採りあげられた「イリシュ」（ブッドデブ作）には、ソネット詩型とベンガル詩の伝統的な韻律の融合の姿が見てとれ、この詩形がベンガル語でソネットを書く際の定番になつていふという。

タゴールは最晩年に「散文詩」に手を染めたというが、現代のベンガル詩人たちが、散文詩は書くことはあつても、むしろさまざまな韻律型を用いつついかに現代的なテーマをあらわしていくことにこだわっている点は、ベンガル現代詩を知る上で重要であろう。現代ベンガル詩の展開は、定型韻律詩からの脱却というよりは、むしろ、韻律の工夫の中に、あるいは、韻律の革新によつて、現代性を確保しようとするベンガル詩人たちの苦闘の歴史であるともいえる。

訳者丹羽京子氏は、この詩人中で、唯一の存命する詩人であるジョエ・ゴージャミに関連して、ベンガル現代詩の一つの到達点の姿を以下のように述べている。

そこにはシヨクテイを想起させるようなモダンな展開もあり、タゴール以来の伝統を感じさせるリリズムもあり、シヨンコを想起させるような死と生の交錯する世界もあらわれているが、すべてをひっくるめてこれがジョエの詩であると感じさ

せるトーンもある。（二五七頁）

読者は、「神なき世界」と「タゴール以来の伝統を感じさせるリリズム」との発展的共存の姿を本書の七人のベンガル詩人たちの詩の中に見出すであろう。

本書で採りあげたベンガル詩人たちの中には、訳者の留学来の親交がある詩人もいふという逸話が紹介されている。その意味でいえば、本書は、そうしたベンガル詩人たちの詩的感性と訳者丹羽京子氏の文学的感性との感応の産物でもある。丹念な訳出への配慮に裏打ちされた、平明にして達意の訳詩は、ベンガル詩への訳者の並々ならぬ学問的関心とともに、深い愛情を伝えるものである。今後さらに丹羽京子氏によつて現代ベンガル詩が邦訳され、ベンガル文学の魅力が日本に伝えられていくことが期待されるところである。

（藤井守男）